報　　告

エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告
― 1998～1999年　第4・5次調査 ―

吉村　作治*　　近藤　二郎**　　長谷川　奏***
中川　　武****　西本　真一****

An Interim Report on Excavation at Dahshur North, Egypt
—4th and 5th Field Seasons—

Sakuji Yoshimura*, Jiro Kondo**, So Hasegawa***
Takeshi Nakagawa****, Shin-ichi Nishimoto****

Abstract

The Egyptian Culture Center of Waseda University carried out the excavation of the fourth and the fifth field seasons at Dahshur North from December 1998 to March 1999. We have concentrated the research on the tomb which would seem to have originally belonged to one "Ipay, the Royal Butler." Whether Ipay actually was buried there is still unclear, though archaeological clearance of the subterranean chambers has been completed.

The most conspicuous was a discovery of the granite sarcophagus measuring 2.8m in length, which was found in the innermost chamber. The inscription on the shabti and dockets suggested that the owner is a "Royal Scribe" and "Steward" Mes in the reign of Ramesses II. Judging from the total assemblage of the objects, the use of the tomb was dated from the late 18th Dyn. to the early 19th Dyn., which implies the same activity, as in the area by Anglo-Dutch expedition and Cairo University in Saqqara. Therefore, our research results shed the light on the discussion of the necropolis formation at the area expanding from Saqqara to Dahshur.

*人間基礎学科　　*Department of Human Basic Sciences
**早稲田大学文学部　　**School of Literature, Waseda Univ.
***早稲田大学理工学総合研究センター　　***Advanced Research Center for Science and Engineering, Waseda Univ.
****早稲田大学理工学部　　****School of Science and Engineering, Waseda Univ.

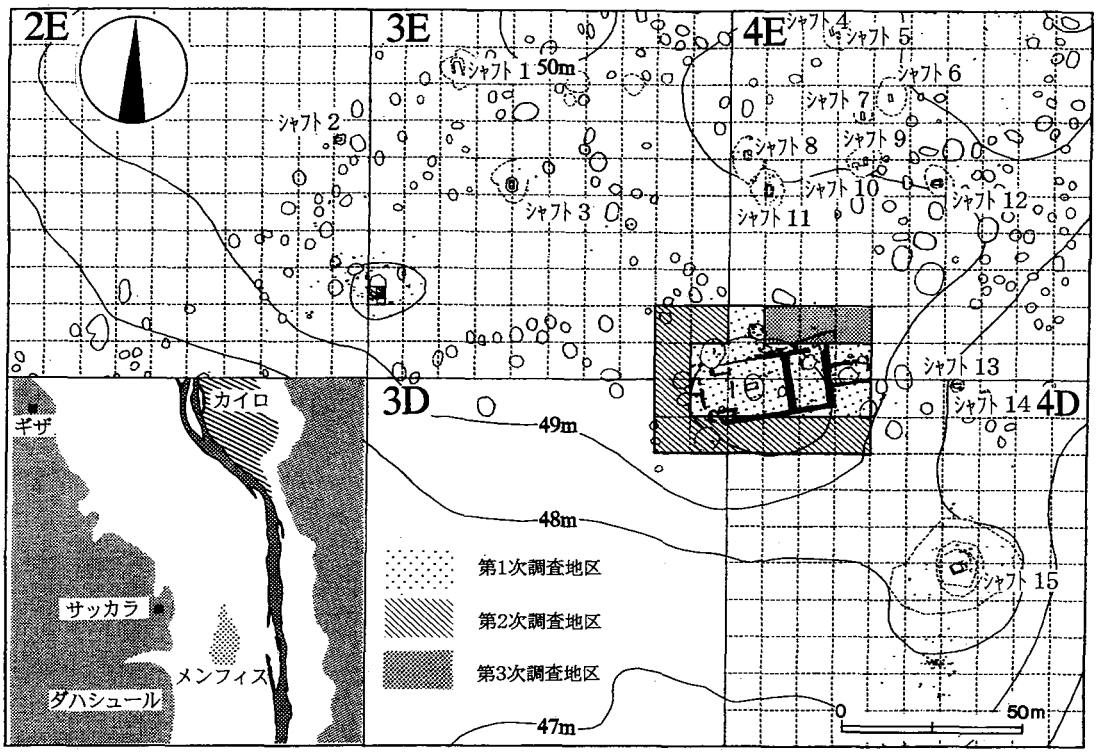


図1：遺構分布図

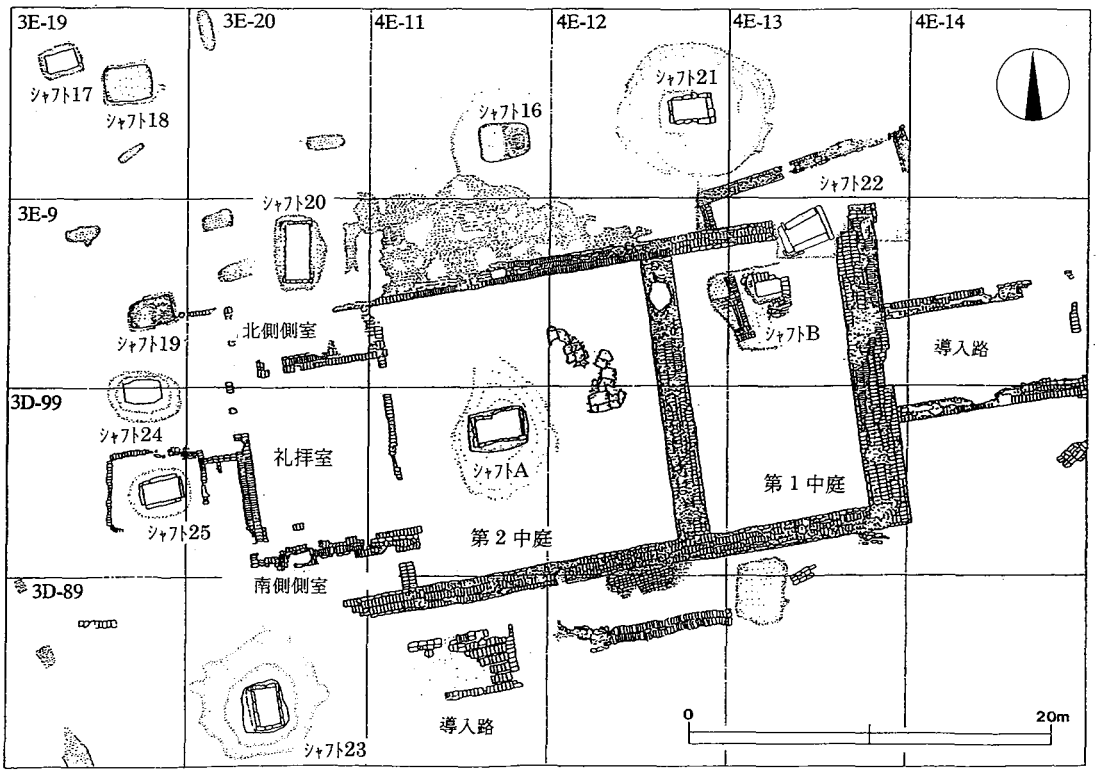


図2：イパイの煉瓦遺構

1．はじめに

早稲田大学古代エジプト調査室[1]は、ダハシュール北地区（図1）において広大な墓域を検出し、墓域の南端からは新王国時代の神殿型平地墓が出土した。同墳墓の上部構造は失われていたが、埋葬のために設けられた地下の部屋は残存していた。日乾煉瓦に押された印影から、「王の書記、イパイ」という銘文が読みとられたため、イパイがこの墳墓の建造者と考えられた[2]。

注目されたのはこの神殿型平地墓の規模であり、長軸47mを測る例はこれまでサッカラ地区で発見されたホルエムヘブの墓に匹敵していた。イパイの墓の周囲には、上部構造の存在が判然としない墳墓が分布しているのは明らかであったため、当面の墓域調査は、このイパイの墓とその近隣地区を集中的に掘り進めることによって、墓域形成の年代と背景を探求する手がかりとすることとなったのである。

出土遺物が最も多く得られたのは、イパイの墓の地下の部屋からであった。地下の部屋は我々がその存在を確認した段階で、既に室内は荒らされており、壁面には火を焚いたことに起因する煤が付着し、シャフトの基底部周辺には地上からなだれこんだ砂が厚く堆積していた。王朝時代の埋葬が、いつの時代に荒らされたかは判然とはしなかったが、室内の発掘作業によって、年代考察に有効な資料が得られるのは明らかであった。

これらの出土遺物からは、新王国時代のアマルナ美術の強い影響が観察され、さらに第18王朝末期のツタンカーメン王とその妃アンケセンアメンの名を有する指輪や、第19王朝のラメセス２世の名が読みとられた。またイパイの墓のシャフトには、アマルナ時代を代表する規格による切石が用いられていた。そのため、地下の部屋は当該の時代を中心に使用されたものと考えられた。ちなみにダハシュールは、古王国時代から中王国時代にわたるピラミッドゾーンとしてその名を馳せてきたが、新王国時代の存在はこれまで知られていなかった。

このたびの調査で最も重要であったのは、イパイの墓の最奥部で部屋の存在が確認され、ここに花崗岩製の石棺が置かれていたのがみつかったことである。棺に記されていた銘文と出土遺物から総合すると、この棺は第19王朝のラメセス２世の時代に位置づけられるものと考えられた。したがって上記の年代観が裏付けられると共に、ラメセス朝時代における活発な墳墓造営活動の一端が窺われ、これまでのメンフィス地域の墓域形成論に重要な知見をもたらすものと考えられたため、ここにその概要を報告する。

2．調査の目的と方法

1996年の予備調査でイパイの墓が検出されて以来、この墓をとりまく2400平米の区画が当面の調査対象地区となった[3]。イパイの墓は、上部構造は残存していないが、東側から斜路、第１中庭、第２中庭、礼拝室とその側室という構造になっていることが判明した（図２）。したがってイパイの墓に関しては、これらの空間構成にしたがって、壁体の建造方法や、床面あるいは床面下部の地業層の構築方法に焦点をあてて観察が行われてきた[4]。

シャフトは石灰岩の岩盤を掘削しており、イパイの墓の例では、掘削の際に生じた石灰岩チップをシャフトまわりに積み上げて、このかさを中庭の床面地業に利用しているものと考えられた。シャフトは13mの深度を測り、シャフト上部は石灰岩の切石が積まれていた。ここでは石灰岩の切石の規格と整形の技法が観察された。さらにイパイの墓では、後に報告するように地下の部屋で石棺が検出されたため、この石棺を降下させた際に生じたシャフトの拡張痕が検討の対象となった。

イパイの墓においては、地下の部屋は２層の構造となっていた。第１層はシャフトの基底部の東側と北側の双方に入り口があり、各部屋をA～G室と命名した。A～E室は東側の入り口から西側へまわりこむ構造となっていた（図３）。A～C室とF～G室は既に第３次調査までに発掘を終え、D、E室は天井岩盤が脆弱であったため、第３次調査の時点で天井の崩落に備えた保護作業が完了していた。したがって第４・５次調査では、これらD、E室に崩落した岩盤のブロックを破砕しながら、第１層の完掘をめざすこととなった。

第２層はF室の発掘にともなって検出された。F室の床面からさらに下降する斜路の存在が確認され、F室床面から約３m下降したレヴェルにH室の

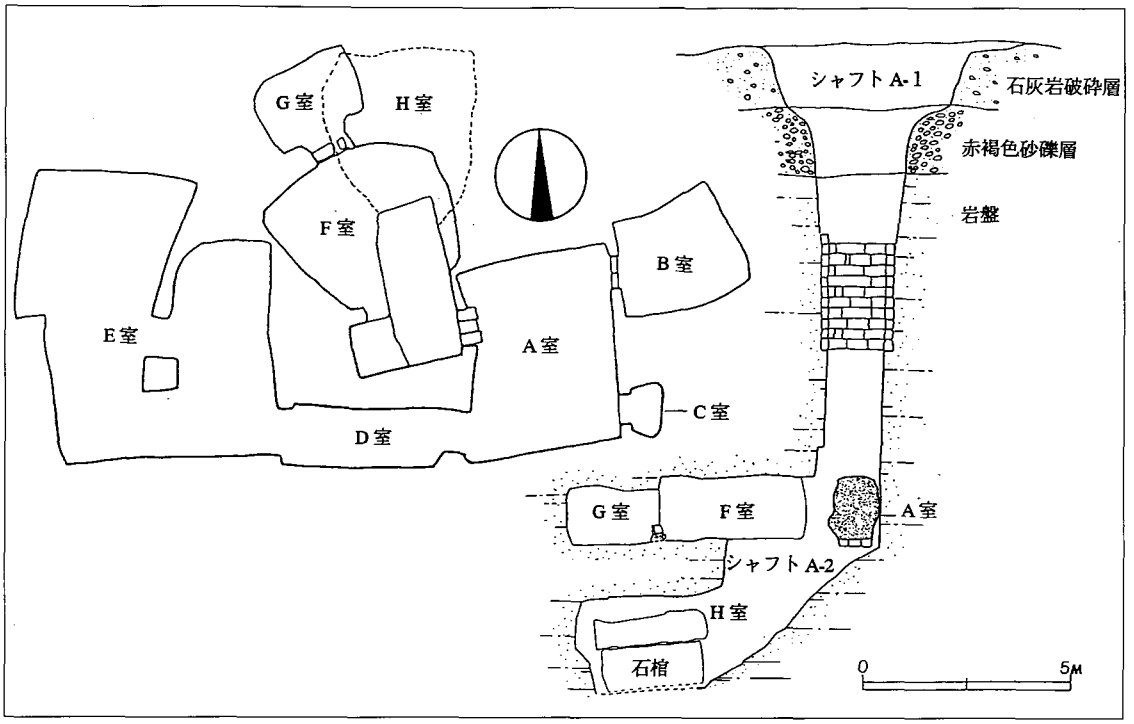


図3：シャフトA断面図及び平面図

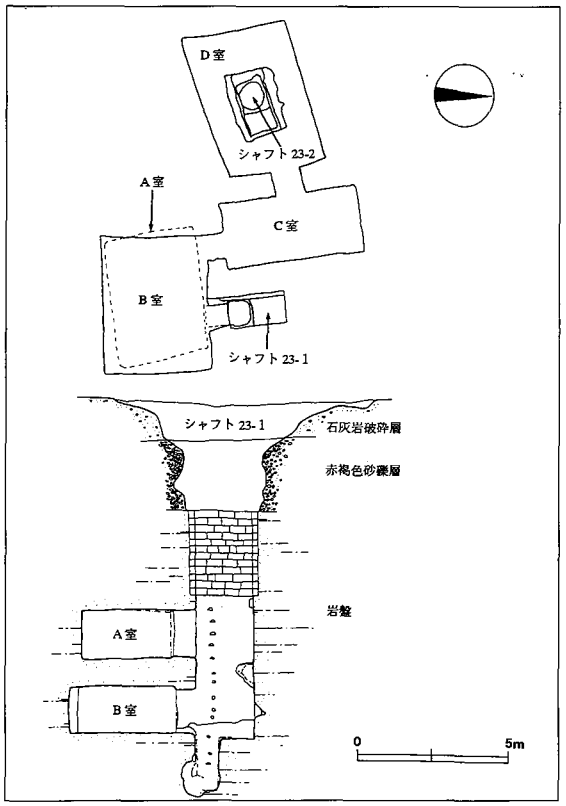


図4：シャフト23断面図及び平面図

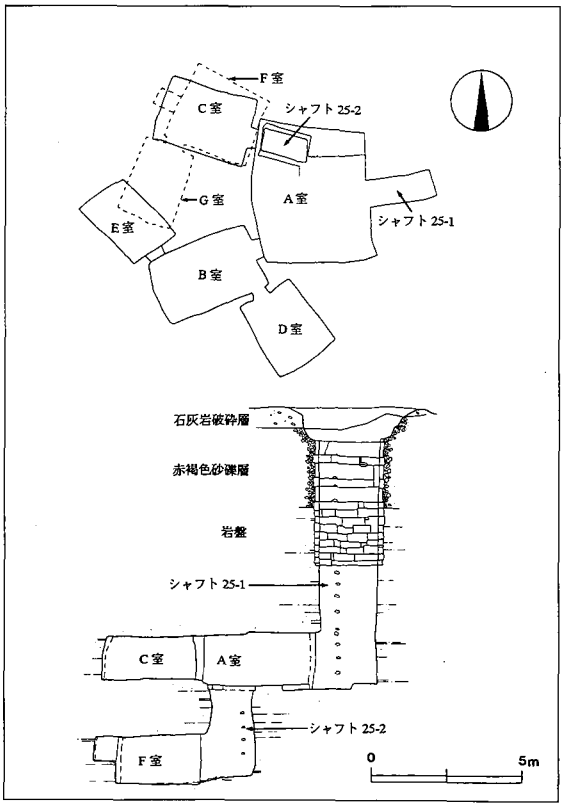


図5 ：シャフト25断面図及び平面図

床面が想定された。注目されたのはこのH室で花崗岩製の石棺がみつかったことであり、石棺の蓋は原位置に近く被さっていた。また石棺のまわりにはアラバスターの壺やシャブティの破片が散乱しており、火を受けていたものも見受けられた。したがってH室では石棺の蓋を開けて内部の残存状況と石棺自体の製作技術と石棺に残された碑文を確認し、H室の床面の発掘を行うこととなった。

イパイの墓の周域では、北側と西側に分布するシャフトの調査（シャフト21～25）が行われた。これらのうち、シャフト22とシャフト23は上部構造が存在したものと推測され、その建造時期をめぐってイパイの墓との新旧関係が明らかになる可能性があり、発掘の展開が注目された。これらのシャフトは、地下の部屋にまでなだれこんだ砂層を発掘し、地下の構造を確認して完了した。

3．出土遺構

イパイの墓では地下の部屋の第１層のすべてにおいて、発掘が完了した。D、E室では天井から崩落した岩盤のブロックを除去したところで、床面直上にいくつかの炭化痕がみられた。これらの炭化痕は木棺やその他の副葬品を燃やしたことに起因するもので、土器・石製容器・ファイアンス容器や、シャブティなども取り上げられた。E室の北側には、同室を改変した痕跡も見られるが、その性格は明らかではない。E室ではシャフトは見受けられなかった。

地下の部屋の第２層では、H室の発掘が完了した。H室は奥行き４m程を測るが方形には作られておらず、石棺を安置するために急ぎ掘られた感がある。石棺は頭部をH室の入り口側すなわち南側に向けた状態で検出された（図６）。部屋の入り口には、石灰岩ブロックを積み上げた封鎖壁が作られていたが、その上部は既に破壊されており、空隙が見受けられた。石棺の内部は既に荒らされており、砂が充満していた。

石棺は赤色花崗岩でできており、長さ2.8m、高さ1.7mを測る。身の上に、ほぼ原位置に近い状況で、蓋が被さっていたが、小振りな身と重量感のある蓋が対照的であり、一見すると身と蓋は別途で製作されたものがそれぞれ再利用されて合わさっている印象が得られた（写真１）。しかしながら、石棺の蓋内面を子細に観察すると、蓋内面が彫りくぼめられる作業工程は中途で終わっており、その規格は身に合致していた。石棺の身と蓋を合わせる止具穴が穿たれていたが、元来予定された数が少なく変更されて、完成を急いだ点が観察された。

石棺に施された装飾に関しては、石棺の身の側面に、沈み浮き彫りによって神々の像のモチーフが施された。頭部にはイシス、足下にはネフティスの両女神が描かれ、頭部の側面にはオシリスとアヌビスの前面に立つ被葬者が描かれている。胴部は、トトやホルスの４人の息子たちなどの神々が描かれている。これら神々の像は、彫られた後で表面に黄色の顔料が塗布されている。

一方、石棺の蓋の顔まわりでは石面が彫られて表現されているものの、襟飾りや頭部の頭髪部分では、これを多彩色の顔料で描いた状況が残存している（写真２）。さらに胴部の銘文帯は黒色顔料で記してあり、足下にはイシスが赤色顔料を主体にして描かれていた（写真３）。石棺の所有者名メスの名は、まずこのイシスの脇で確認された。これら顔料で描かれたモチーフは、元来は身と同様レリーフで表現される予定であったものと考えられた。

これらの状況を総合すると、石棺は急場で製作され、このH室に安置された背景が推測された。石棺の身には棺を下降させるために、ロープで棺をくくり、これを固定させるために用いられたモルタルが残存していた。地表面から穿たれたシャフトの南北面には、石棺の幅に対応する幅でこれが彫りくぼめられた痕が観察されていたが、これは石棺を下降させる際に幅が広げられたことに起因するものと推測された。

シャフト21は、シャフト入り口が切石で飾られており、地表面から約９mで地下の部屋が現れた。部屋は西側に１室が作られており、奥行きは３m程度を測った。この部屋からは木棺が検出されている。

シャフト22は、イパイの墓の前身の墓に伴うシャフトであり、シャフト発掘のなりゆきが注目されたが、地表面から約５mの深度でシャフト掘削が未完成の段階で放棄された状況が明らかとなった。シャフト内部では、イパイの名が押され

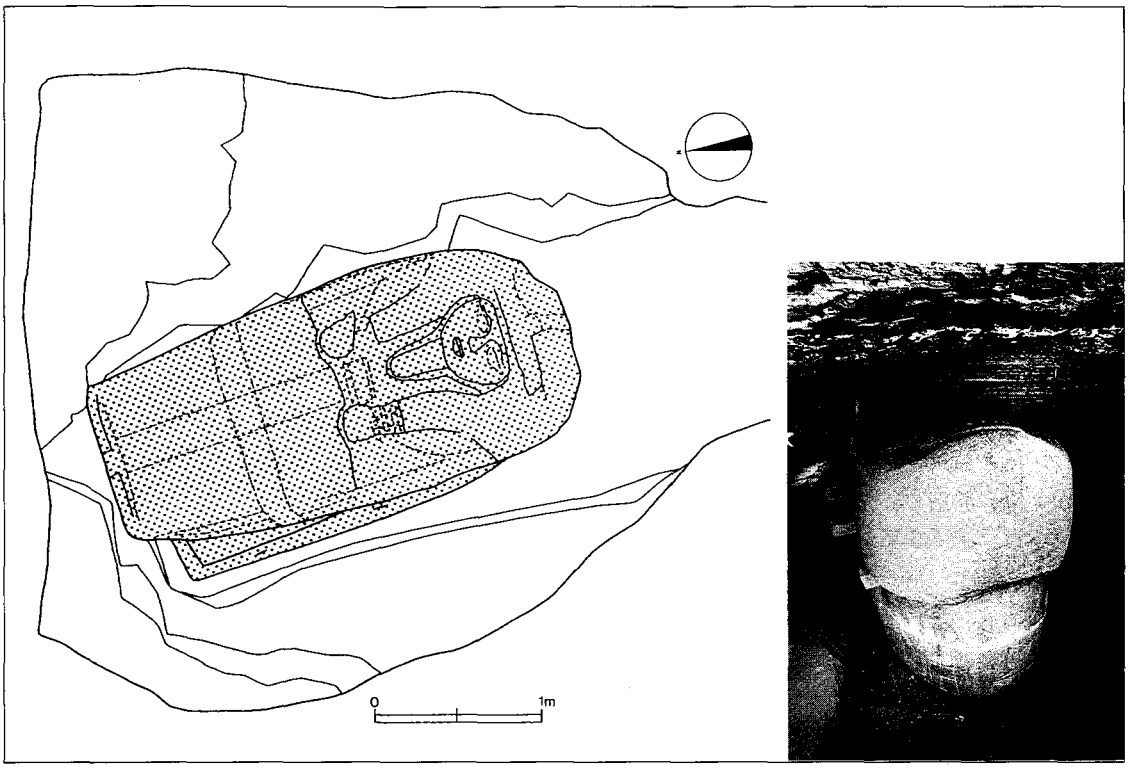


図６、写真１：シャフトＡ－Ｈ室石棺出土状況

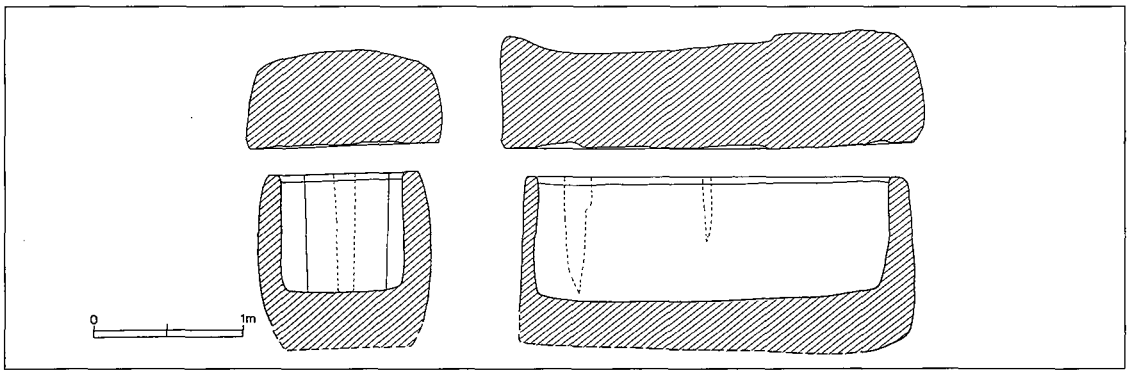


図７：石棺断面図

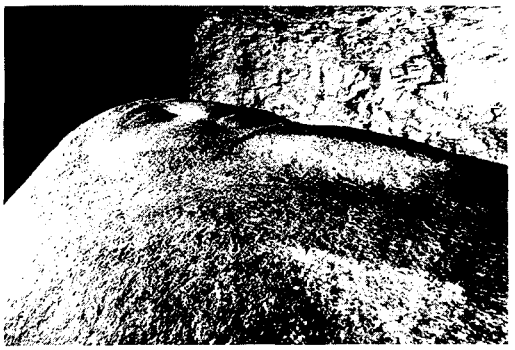


写真２：石棺蓋

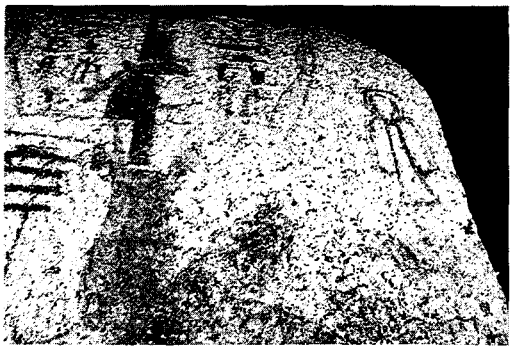


写真３：石棺足裏

た煉瓦が数個検出された。

シャフト23は、日乾煉瓦の斜路をもつ上部構造を有すると推測された。シャフト23の掘削は、イパイの墓の建造に先立つ可能性も見受けられた。シャフトはイパイの墓と同様の規模をもち、入り口は切石で飾られていたが、長軸が南北方向を向く。地表面から約８mの深度に、南側に広がる１室（A室）が設けられていた。さらに３m程下降したところに地下の３室（B～D室）が設けられており、最奥部のD室にはさらに下降するシャフトが設けられていたが、未完成であった（図４）。同シャフトからは、レリーフ、木棺、シャブティなど多数の遺物が取り上げられた。

シャフト24は、シャフト入り口の飾り石は残存していなかった。地表面から約９mの深度で地下の部屋が現れた。部屋は東西に２室（A、B室）が作られており、両者の間は東側から西側に階段状に降下し、入り口には封鎖壁が一部残存していた。西側のB室になだれ込んだ砂層には多数の木棺片が散乱していた。

シャフト25は、シャフト入り口は小規模ながら幅広の石材が飾り石に用いられており、シャフトの軸線がイパイの墓のシャフトに一致することが注目された。地表面から約７mの深度で地下の部屋が現れた。地下は２層の構造となっており、第１層はシャフトからつながるA室から奥部でさらに分岐する４室を有していた。A室になだれこんだ砂層からは、数基の木棺が検出された。A室の北西隅には第２層につながるシャフトが設けられており、２室が作られていた（図５）。

４．出土遺物

1）イパイの墓・第１層D、E室

イパイの墓の第１層ではD、E室から遺物が取り上げられた。ここでは木棺と推測される多数の木片が火を受けていた。さらに多数のファイアンス製のシャブティが取り上げられた。これらはその殆どが、乳白色の釉が施されたもので、所有者銘にはアメンエムオペト、フイ、パシェドゥウの名が検出されたため、同室においてこれらの所有者による埋葬が関わっていた可能性が考えられる。

同室からは容器片も多数出土した。接合作業の結果、土器にはミニチュア、皿型、壺型などの各種の器種が確認され、壺型土器の中には花飾りが描かれた多彩色の彩文土器が多数含まれていた。石製容器やファイアンス容器にもさまざまな器種がみられ、アラバスターで作られたベス型容器も復元された。

2）イパイの墓・第２層H室

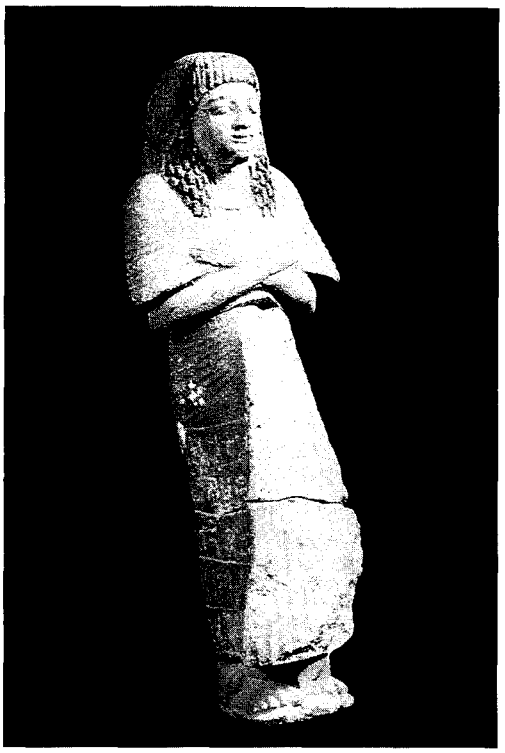
イパイの墓のH室では、石棺の内部とその周囲から、石棺所有者の埋葬に関わる多数の遺物が取り上げられた。

石棺の所有者を特定する有力な資料となったのが、砂岩製のシャブティである。同シャブティは石棺の内部と周囲で３つのパーツに別れて取り上げられたが、接合されて完形となった。高さは36cmを測り、彩色が施されている。人物像は頭部にヌビア頭巾を被っており、キルト周りには碑文が施されていた。この銘文から、「王の家令、書記メス」の名と称号が読みとられた（写真4-1）。

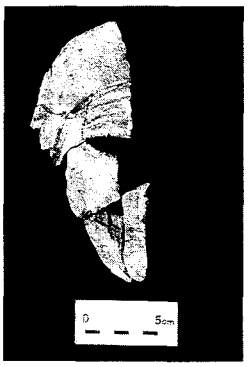
石棺内部には、元来木棺が安置されていたことを窺わせる小破片が出土した。残存していた木棺片は足下部分にあたり、ヒエログリフの碑文列が一部残存していた。またミイラの顔部分に被せる木製のカバーがみつかった。このカバーには被葬者の顔が描かれており、頭部の鬘から、鼻・口・顎の部分が復元された（写真4-2）。また石棺の内部からは被葬者メスの遺体と推測される骨片が出土し、同一片とみられる骨片は石棺の周囲からも取り上げられた。

石棺の被葬者を年代づける重要な資料となったのは、ヒエラティックのドケットであり、既に第２次調査のシャフト発掘の時点でみつかっていたドケットに接合された破片には、「ラメセス２世の治世第７年」の記述がみられた。同年代は石棺の様式や出土遺物の総体にも合致する。ドケットにはこの他に、「アメンの歌い手」の称号が記されたものがみられた。

石棺の内部と周囲からは、多数のシャブティがみつかっている。ファイアンス製のシャブティの中には着衣型のものもみられ、メスの名が記されていた（写真4-3）。木製のシャブティも多数みつかったが、これらは表面にビチュメンが塗布されており、ビチュメン部分が剥落しているために碑文の残存率は低い。木製シャブティの多くは、石棺が荒らされた折りに、燃やされて灯火のために



4—1



4—2

4—3

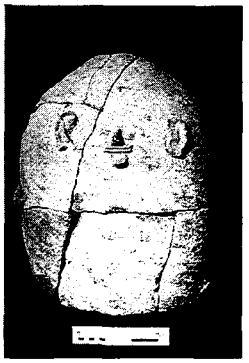
4—4

4—5

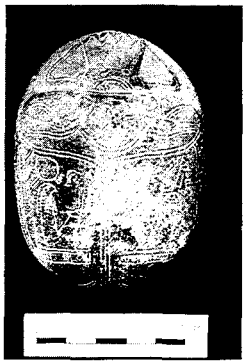
4—6

4—7

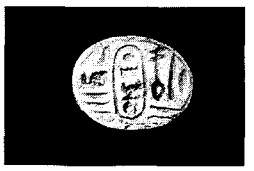
4—8



4—9



4—10



4—11

4—12

写真4：出土遺物

使われている。

石棺の周辺からはさらに、心臓スカラベやファイアンス製の投げ棒がみつかった。心臓スカラベは緑碧石で作られているが、碑文から所有者銘がバクエンアメンと読み取られたために、他の埋葬用遺物が石棺内に入り込んだものと考えられた。ファイアンス製の投げ棒は副葬用のもので、黒色顔料でウジャトが描かれている（写真4-4)。

石製容器片も多数取り上げられた。カノプス壺の蓋のホルスと４人の息子は、石製のものと、ファイアンスでつくられたものがある（写真4-5, 6)。その他に大型石製容器片が取り上げられた（写真4-7)。

3)　イパイの墓の近隣シャフト

イパイの墓の周囲に分布するシャフトのうち、特にシャフト23～25からは、多数のシャブティが取り上げられたが、これらの所有者名はケンティケティヘテプ、ヘヌトミラー、ピプイなどで、これまでイパイの墓で検出されていた一群とは異なるものであった。

シャフト23からはレリーフブロックが出土し、表面に描かれたモチーフはこれまでイパイの墓の出土遺物でみられていたパシェドゥウの名が記されており、パシェドゥウ夫妻の葬列場面が描かれていた。

木製棺は、シャフト21, 23～25などで出土した。これらの多くは断片的であり、棺の全体像を復元しうる例は少ない。シャフト21ではビチュメンが施された上に、黄色顔料によって装飾が施されていた。シャフト23, 24で出土した木棺には、棺の顔部分が残存している例がみられ、眼部分にはめこまれた象眼まで復元されるものもみられた（写真4-8)。さらにシャフト23からは土製棺が出土した。これは棺の上半身部分がはめこみ式の蓋になっており、ここには人面が表現されていた（写真4-9)。

スカラベは、最も大型の心臓スカラベがシャフト25から出土した。これは長さが８cmを測り、表裏両面にオシリス神と冥界の場面が描かれている（写真4-10)。シャフト23から出土した小型のファイアンス製スカラベは、トトメス３世の名を有していた（写真4-11)。

護符もシャフト23, 25を中心に出土した。泣き女のポーズをとるガラス製護符や、オシリス・アヌビスなどの冥界の神々を象った多数の護符が出土した。シャフト25から出土したガラス製の護符はウジャトを象っており、裏面にはアメンヘテプ３世の名が彫り込まれていた（写真4-12)。

5．おわりに

第４・５次調査の最も顕著な成果は、シャフトの最奥部で花崗岩製の石棺が検出されたことで、碑文資料から同棺に埋葬されたのは、ラメセス２世時代の高官メスと推測された。イパイの埋葬痕跡が、これまでのところみつかっておらず、地下の部屋はシャブティなどで確認されるアメンエムオペト、フイ、パシェドゥウなどによって繰り返し利用された時期が含まれると考えられるものの、第18王朝の末期から第19王朝初期にかけての時代に墓が利用されたものと推測されていた。

今回の調査で検出された石棺は、第19王朝初期に墓を再利用した痕跡を明確に裏付けるもので、このイパイの墓をめぐる年代観は、ダハシュール北地区の墓域全体の成立年代に深く関わるものと推測される。アマルナ時代以後、メンフィスはその政治的地位を回復していき、ラメセス朝の時期になっても、メンフィスはその重要性を維持していたと考えられる。棺の出土は当該時期における活発な墳墓造営活動の一端を示しているものと思われる。

新王国時代のメンフィスにおける墓域形成の背景に関しては、これまでサッカラにおける墳墓の調査例を通して論議されてきた[5]。しかしながら、本調査で検出されたイパイの墓が、サッカラに分布する神殿型墳墓と共通する形態をとり、当該地区の墳墓群とほぼ共通の年代に利用され、さらには本調査地区の墓域にはイパイの墓と同等規模の大型墳墓が多数分布するであろうことを総合すると、これまでの墓域形成史の論議は、従来のサッカラに止まらず、さらに５kmも南に広がるダハシュールまでを含めて考察するべきことが明らかとなった。

本調査の遂行に際し、特に許可関係の取得にあたり、以下のエジプト考古最高会議（Supreme Council of Antiquities)の方々の協力を得た。Dr.

´Aly Gaballah ´Aly (Secretary General), Dr. Zahi Hawass (Giza Inspectrate)、Mr.Muhammad Hagras, Mr.Magdy al-Gandur, Mr.Sabry Farag (Saqqara Inspectrate).

なお本稿の作成に関して、菊地敬夫氏（ハイデルベルク大学）、河合　望氏（ジョンズ・ホプキンス大学）からは貴重な学術情報を提供していただいた。また本稿の図版作成と編集作業に際して、早稲田大学古代エジプト調査室では和田浩一郎、池田和美、榊原里佳、西坂朗子、馬場匡浩の諸氏、早稲田大学理工学部建築史研究室では遠藤孝治氏の協力を得た。末尾ながら記して、謝意を表したい。

註

1）主任：吉村作治、人間科学部教授。ダハシュール北地区調査は、早稲田大学と東海大学情報技術センターとの合同で開始され、また出土遺構の建築学的分析は、予備調査以来、早稲田大学理工学部建築史研究室が担当している。

2）イパイの名をもつ煉瓦の押印資料には、これまで２種類が確認されている。縦に１行のものは、「オシリス、王の書記イパイ、声正しき者」、2行のものは、「二国の主に愛されし、王の真の書記、王の執事、両手の清き者、イパイ、声正しき者」と記されている。

3）第3次調査までの成果は、以下の報告を参照されたい。吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、坂田俊文、恵多谷雅弘、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区予備調査報告」『人間科学研究』第10巻、第１号、早稲田大学人間科学部、1997年、115-122頁。吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一、柏木裕之「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告-1997年　第1・2次調査」『人間科学研究』第11巻、第１号、早稲田大学人間科学部、1998年、109-120頁。吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告-1998年　第3次調査」『人間科学研究』第12巻、第１号、早稲田大学人間科学部、1999年、137-149頁。Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Sakata, M. Etaya, T. Nakagawa and S. Nishimoto, "A Preliminary Report of the General Survey at Dahshur North, Egypt." *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* vol.XX(1997), Tokyo, pp.3-24. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa, S. Nishimoto, H. Kashiwagi, T. Sakata and M. Etaya, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt." *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* vol. XXI(1998), Tokyo, pp.3-32. Yoshimura, S., J. Kondo, S. Hasegawa, T. Nakagawa, S. Nishimoto, T. Sakata and M. Etaya, "Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt." *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* XXII(1999), Tokyo, pp.3-18. Yoshimura, S., J. Kondo and S. Hasegawa, "A Japanese Expedition Discovers the New Kingdom Necropolis at Dahshur." *KMT* vol.10, no.3(1999), Sebastopol, pp.36-43. Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "New Discovery of Ramesside Sarcophagus from Dahshur." *Egyptian Archaeology,* no.15, London, 1999, pp.5-7. ,Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "New Kingdom Necropolis at Dahshur -The tomb of Ipay and its vicinity-" in Málek, J. and M. Verner eds., *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Prague. (forth coming)

4）建築遺構に関しては、以下の報告を参照されたい。西本真一、吉村作治、中川武、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　1」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1996年、391～392頁。西本真一、吉村作治、中川武、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、遠藤孝治「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　2」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1997年、159-160頁。西本真一、遠藤孝治、柏木裕之、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　3」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1998年、227～228頁。遠藤孝治、西本真一、柏木裕之、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　4 -出土し

たピラミディオンに関する考察-」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1998年、229～230頁。西本真一、遠藤孝治、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　5　-イパイの神殿型墳墓における地下構造-」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999年、215～216頁。遠藤孝治、西本真一、佐藤雅彦、中川武、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について　6　-シャフト墓の掘削方法について-」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999年、217～218頁。

5）サッカラの墓域研究に関しては以下の代表的報告を参照されたい。

〈Teti Pyramid Precincts 〉

Firth, C.M. and B. Gunn, *Excavations at Saqqara Teti Pyramid Cemeteries.* Vol. I, Cairo, 1926. Gaballa, G.A., *The Memphite Tomb-Chapel of Mose,* Warminster, 1977. Quibell, J.E. and A.G.K. Hayter, *Excavations at Saqqara. Teti Pyramid, North Side*, Cairo, 1927. Zivie, A.-P., "La tombe d'un officier de la XVIIIé dynastie à Saqqara" *Revue d'Egyptologie* 69(1979), pp.135-151. *Dé couverte à Saqqarah. Le Vizir Oublié* , Paris, 1990.

〈Unas Pyramid Precincts 〉

Martin, G.T. *The Memphite Tomb of Horemheb Commander-in-Chief of Tut'ankhamun I,* London, 1989. *The Hidden Tombs of Memphis*, London, 1991. Martin, G.T., J. van Dijk, D.A. Aston and M.J. Raven, *The Tomb of Tia and Tia*, London, 1997. Martin, G. T., M.J.M. Raven, B.G. Aston and J. van Dijk, "The Tomb of Maya and Meryt : Preliminary Report on the Saqqâra Excavations, 1987-8." *The Journal of Egyptian Archaeology* 74(1988), pp.1-14. Quibell, J.E. *Excavations at Saqqara 1908-9, 1909-10,* Cairo, 1912. Raven, M.J., *The Tomb of Iurudef. A Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, London, 1991. Tawfik, S., "Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara 1. Architecture." *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* ,47(1991), pp.403-409.